

ポルターガイストの話（二）

1

ポルターガイストに関心をはじめたのはごく最近のことである。一九世紀の聖母マリアの奇蹟を追いかけているなかで、たまたま出たばかりの三浦清宏『イギリスの霧の中へ——心霊体験紀行』（南雲堂）を土浦の本屋でみつけた。聖母をめぐるフォーク・カトリシズムのとらえ方にも四苦八苦の頃だったから、プロテスタンテイズム文化圏の超自然現象に入ってゆくことにためらい

関 一 敏

を感じた記憶がある。比較すると面白いだろうという魅力がいつぼうにあり、焦点の拡散をおそれる気持が他方にあった。駅前から家にむかうバスの中で、あてもなくパラパラとページを繰りながら、やばいなあ、この分野はやばいなあ、なにしろ「オカルト」だもの、とあまり意味のない台詞を反芻していた。結局、この分野に入りはじめたのはその年の秋、今から二年前のことである。

二年間の勉強で、それも心霊体験との直接のつきあいなしに何かを語ろうというのでは、霊の祟りがあっても

不思議ではない。ポルターガイストに限っていえば日本の産ではないから大丈夫かと思っていたら、柳田や南方のとりあげている「池袋の女」はどうもその種の現象だったらしい。昭和五〇年代には立川や八王子にも似た出来事が住民を悩ませたという（宮田登『妖怪の民俗学』岩波書店、一九八五）。しかし、ここで何も尻込みする必要はあるまい。無用に喋りすぎないこと、恣意的な解釈をとおざけること、そしてとりわけこの分野に多いけうりを避けること。つまり、いつもの心構え、平常心になるべく大切にして、ひとつやっておこうと思うのである。霊よ騒ぐな。

2

ポルターガイストはもともドイツ語で「騒がしい霊」「騒霊」を意味する。心霊研究の一集成ともいうべきフォーダー事典には次の説明がある。「騒々しい霊。悪意のある心霊的な騒ぎを、ある種の場所、ある種の

人間、多くは疑いを知らない感受性の強い人間の前で周期的にひきおこす。みたところ幽霊屋敷に似て、幽霊にとりつかれた人間がそこにいるかのようである。人間の体に手ひどいケガを負わせることはめったにないが、割れ物をこわしたり、時として家具や衣類に火をつけたりすることで人に大きなダメージを与えてくる。この現象は第三者がくると中断されることがある。また場合によっては現象の威力が増すこともある」（N. Fodor, *An Encyclopedia of Psychic Science*, Citadel Pr., 1966）。フォーダーの記述はさらに続いて、焦点となる人物にたいするポルターガイストの攻撃はその人物が家移りしてもやまない場合のあること、この怪異現象をコントロールする方法はないが、まれには問答や親しみのある対応がこれを防ぐこと、一般に心霊現象が闇を好むのにたいして白昼の出来事であること、等々の特徴をあげている。これらの特徴については、多少のニュアンスを含みながら、類書にも同様な説明がのっている。多少のニュアンスというのは、とりあげられる事例やそれを説明す

る著者の立場の違いによって、列挙される特徴のいずれを重要視するかが異ってくるからである。ひとつだけ他の説明例をあげてみよう。これは、日本語で書かれた心霊研究関係の著作のなかで、典拠がはっきりしているという意味で信頼のおける記述例である。「食器や家具が見えない手に操られるかのように宙を飛んだり、原因不明の怪音がきこえたり、不意に部屋の温度が下がったり、あるいは人間の身体が宙に浮かび上がったたりする一群の心霊現象をさす。特定の人間、それもたいていは子供や思春期の少年少女の周囲で発生するのがふつうで、家族以外の人間がその場にいと、現象は起らないことが多い。しばしば驚くべき強い力が作用し、重いソファーが持ち上げられたり、頑丈な金具がねじ切られたりもする。コップや花瓶が壁にたたきつけられたり、ナイフが投げつけられたりすることもある。しかし、人間に直接危害が加えられることは少ない」（山河宏「ポルターガイスト」の項、『新・心霊科学事典』潮文社、一九八四）。

二つの事典から引用してみたのは、ポルターガイストの概略を知っておきたかったことのほかに、両者の記述方法に共通する態度を考えたからである。「めったにない」「……たり、……たり、」「ことが多い」「また……場合もある」「こともある」等々の書き方は、著者の不確かさのあらわれどころか、その知識に信頼のおける保証書のようなものである。というのも、ポルターガイストは「……もある、……もある」の列挙方式をとらざるをえない数多くの出来事を歴史的に蓄積してきた。たとえば人間の体に直接危害を与えることは「少ない」が、人体に歯型を残す例「もある」、というように（因みにこれを「噛みつく騒霊」biting poltergeistなどとよぶ）。こうした記述方法とその背景にある累積された事例のヴァリエーションのあり方は、「ポルターガイスト」という名称が何らかの実体を直接さし示すというよりも、ある種の徴候が一群となってひとつの言葉にくくられていることを意味している。そこには原因が何やらはつきりしていないが、結果としての現象がひとつの集

合をなすと考えられる場合の医学的命名法、「症候群」 syndrome と同じ発想がある。なるほど名称は「ガイスト(霊)」だが、それはさまざまな現象とつねにセットになって、現象のほうから推測された呼称にすぎない。近代医学との類比でいえば、症状は山積みされていながら、病原菌のいまだに発見されていない段階である。その病原菌をかりにポルターガイストと名づけたということなのだ。

3

かりに名づけられたものだからといって、一群の現象がまやかしだというのではない。それぞれの時代には固有の名づけえぬものがあり、その名づけようのない何ものかをカッコでくくってしまう便利な符牒が発明される。命名によって時代の知識の体系が、あたかも不明の現実を消化しつくすようにみえるけれども、じつは手に負えない流動的な認識対象をカッコに閉じこめるにすぎ

ない。しかし人間の心の不思議な運動は、かりの命名であつても、カッコであつても、一度名づけられた対象をその名前によって理解してしまう避けがたい傾向をもっている。ポルターガイストよりは多分はるかに日本人になじみの深い UFO を考えてみればよい。UFO の原義は「未確認飛行物体」だから、これも「症候群」のかりの名称にすぎないのだが、空中に何やら正体不明のものが出現したときに、あれは UFO だと「確認」してしまえるのが現代の奇妙な状況なのだった。

こうしたカッコ言葉（といっておこう）には不思議に想像力をかきたてる空白の部分があつて、そこに生み落された噂や臆説がいく重にもこれをとりまく仕組みがあるのだった。この仕組みをイメージするには、近年になって発見された病のひとつ、エイズをめぐる社会的神話（男色家の病）をみるべきである。確認しうるのは免疫不全という一群の現象であり、その原因であるはずの何かはまだ確定されていない。現象と現象以前、結果と原因が医学的根拠をもってむすびつけられない段階では、

かならずしも根拠のあるとはいえない因果論によつて空白部分を充たそうとする社会的試みが生まれる。しかも

エイズという名称がもとも特定の症状に由来する言葉であるにもかかわらず、一度この用語が社会化するや、まるで病因を指示するかのようふるまいはじめる。それは恰度、社会、病原菌としての男色家が身体の病原菌に投映されているかのである。

カコ言葉の仕組みに本当に分けいるためには、ひとつひとつの言葉がもつ歴史性を丹念にたどるしかない。それはたんにUFOとかポルターガイストといった、いかにも怪しげな言葉だけの問題ではない。もっともっと親しみのある(?)ありふれた(?)言葉である「死」はどうか。「死」というかりの名称に時代と社会の心性がいかなる意味をみたくしたか、「死」の噂や臆説が時代／＼にいかなる「生」のイメージを結んできたかを考えはじめたのは、フランス『アナール』派を中心とする社会史的手法の功績だった。では彼らの発掘してきたもうひとつの大きなテーマ、「子供」はどうか。

4

一九世紀聖母出現がそうであつたように、ポルターガイストも「子供」と結びついた表象をもっている。それはまた「死」「他界」とのかかわりのなかで理解されてきた歴史をもっており、近代的なポルターガイスト史の発端を一九世紀半ばに設定する点でも聖母出現と並行関係にあるといえる。ただ、聖母出現がフランスを中心とするカトリック圏の出来事であるのにたいして、他方は米英といったプロテスタント圏に属するという対照的な特徴がある。この類似と対比のありようを一步ふみこんで考えていくと、私たちにみえてくるのは(たとえこの表現が唐突に響くとしても)すぐれて現代的な意味を包みこんだ比較文化論的課題である。一九世紀産業社会の黎明期、都市化・近代化(そして宗教的にいえば論争の一点である世俗化が民衆レベルで構築してきた「死」の表象と「子供」の表象は、これらの奇妙な出来事に二

つながりに包摂されているからである。

先に「ひとつひとつの言葉がもつ歴史性」といったのはこのことに関連している。それは語源学的な遡行ではない。概念を原義に忠実にという教訓でもない。P・アリエスが「死を前にした人間の態度」によって「死」の社会史を語るように、「聖母」とその「奇蹟」を前にした人間の態度、「ポルターガイスト」を前にした人間の態度を歴史的にたどること。これらの正体不明の現象との対応のなかで、一九世紀が生み出してきた「死」のイメージ、「子供」のイメージを個々の文化において飽くまで歴史的にとらえなおすこと。ここで歴史的という意味をもう少し具体的にいいかえてみよう。前節でのべたカッコ言葉との関連でいえば、ポルターガイストや聖母の奇蹟というカッコにくくられる以前の事件を細部にわたって復元することである。これらの言葉によってそれ以後の正体不明の不定形の出来事があたかも了解可能であるかのように受けとめられる前に遡って、こうした命名（すなわち分類）がどのようにしてなされたかをその

出来事の展開にそってたどることである。さらにいかなれば、聖母や天使や死霊をめぐる社会表象史のヨーロッパ的累積のなかで、近代の門口にたつ一九世紀が特定の歴史的事件を媒介にして、その死生観（他界観・現世観）を形成していく発生論的過程にたちあうこと。

こうした命名の転回点に位置する歴史的事件として、フランスにラ・サレット（一八四六）もしくはルドルフ（一八五八）の聖母出現があり、アメリカにハイズウィル&ロチェスター（一八四八）のポスターガイストがあった。別名「ロチェスターの怪音」とよばれるこの事件はのちに近代スピリチュアリズム modern spiritualism 運動の曙光とされている。

5

さて、ここまで書いたところで、ざわつくのは騒霊ではなく、ひとりよがりの書き手の心かという迷いが生じているのだが、今のところはこだわらずに先を書いてし

まおう。ハイズヴィル&ロチェスター事件を考えるため
のもうひとつの遠まわりをしたいと思いますと思うのだ。

『ポルターガイスト』（一九八二）という「オカルト」

映画があった。S・スピルバーグ（かれは異界からの侵入者がなんと好きなのだろう）制作、T・フーパー監督。今春テレビでも放映した。舞台はアメリカのとある新興住宅地「緑の谷」の一画、家屋は完成しているが庭に小さなプールを作る工事が進行中である。一家は五人。三〇代の父親スティーヴと母親ダイアン、三人の子供たち（ダナー六歳、ロビー八歳、キャロライン五歳）。父親は「緑の谷」の開発にあたる不動産会社に勤務している。物語の展開は随処にちょっとした小道具をさしはさみながら見る者の心をそらさない工夫がなされているのだが、荒筋そのものは簡単である。嵐の夜、末娘のキャロラインが子供部屋から姿を消してしまう。その前に映画の冒頭では消し忘れたテレビの画面からかすかに声のようなものが届いて、キャロラインと交信しはじめるシーンがあった。やがてその「テレビの人たち」が家の

中へと入りこむのをきっかけに、小さないくつかの異変が家の中に生じ、娘の失踪の伏線となっていた。話のひとつのは、いなくなったキャロラインを両親が救い出すまでのドラマである。この間に一家を訪れる人間はごく限られている。同じ住宅地の販売営業で好成績をあげていた父親が会社を休むようになり、終日家にとじこめるようになると、ひきぬきを心配した経営者が一家を訪れる。この時の経営者の話には今後開発する予定の小高い丘にある墓地が出てくる。墓地なのにと不審におもう父親にたいして、前にも同じことが谷の方でもあった。墓を移転すればいいと経営者はいう。「これまでに不満をいつてきた者はいないぞ」。いや、じつは不満な者たちがいた、墓標だけを移されてコンクリートの下にとじこめられた死者たちはおおいに不満だったのだ、というのが後段の種あかしになっていた。心霊研究家と霊能力者タンジーナの助言にしたがって、他界との通路のある子供部屋からキャロラインを両親が奪還したあと、もう一度子供を奪い返しに奇怪な者たちが一家に襲いかかる。

さらには工事中のブルの底から、石畳や屋敷内の床から次々と棺が地面をつきやぶって突出し、死骸が転がり出す。敷地はちょうど墓地にあたっており、それを知らずに入居した一家を死者たちの霊が追放しにやってきたのである。

この映画は今おもうと、二つの解釈をポルターガイスト現象について提示していた。ひとつは現象の原因が「死者」にあつて、「生者」である子供は死と生をつなぐ媒介項の役割をになうこと。この解釈は一八四八年の事件にも、地下室の死体からのメッセージを読みとる試みとして登場していたから、いわば古典的なポルターガイスト理解である。心霊科学 *psychical research* がのちに主張しはじめるサイコキネシス(念動)説は、ここでは採られていない。もうひとつは、家か人かについての解釈が提出されていたことだった。映画によると、ポルターガイストは家(のある場所)に原因をもっている。キャラクターを媒介者として現われる不思議な出来事も、テレビの回路から家の中に入ってきた地下の死霊たちのし

わざであるから、この場合、一家が引越してしまえば少くとも災難から免れることができる。この点は、ハイズヴィルの出来事と相容れない解釈をとったことになる。三〇キロほど離れたロチェスターに移ってもなお、娘のひとりケイト・フォックスには怪音と変異がつきまとったというのが歴史的事件の眼目になっていたのだから。しかし、もうひとつ、これらとは全く別の(本当に全く別だろうか?)主張がこの映画には隠されているらしい。家庭のドラマ、ホームドラマとしてのオカルト映画というのがそれである。

(この項つづく)

(筑波大学)